

実践 3 『登録画面（紐付け）』を作成する

事前確認

手順

手順は実践 2 とほとんど同じです。紐付け部分が違うので、紐付け箇所を中心に作成箇所を確認します。

実践 1 の手順で『REST 一覧画面』を作成します。

その後実践 3 で『REST 登録画面（紐付け）』を作成します。



実践 2 と手順はほとんど同じですが、点線内が紐付け画面で追加されている機能です。

ここを実践 3 で作成します。

紐付けしたい行のチェックを行うと右のテーブルのデータのどれを紐付けるのかを

選択でき、実行をクリックすると DB へ紐付けた内容が登録されます。

[作成する画面の確認]

「基本の更新画面で作成したメインテーブルの横に紐付け用のテーブルの有る画面を作成する」

システム機能	紐付け 選択	紐付け 実行	システム機能 ID
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	1
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	11
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	111
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	1111

「メインテーブルで紐付けにチェックをしてから、紐付けテーブルで紐付けたい行にチェックを入れると紐付けができる
紐付けできたデータはメインテーブル側に内容が表示される仕組み」

※紐付け選択チェック欄では「入出力要素no(rest)」をkeyにする
紐付け実行チェック欄では「プロセス要素no(機能)」をkeyにする この二つを紐付ける機能

ER 図を確認する

作成する画面の『REST』テーブルを中心に ER 図を確認。

紐付けは『REST』画面から『システム機能』と紐付けをおこないます。

上記 2 つのテーブルの間に『システム機能_入出力要素』テーブルがあります。

ここに紐付けしたデータが入ります。

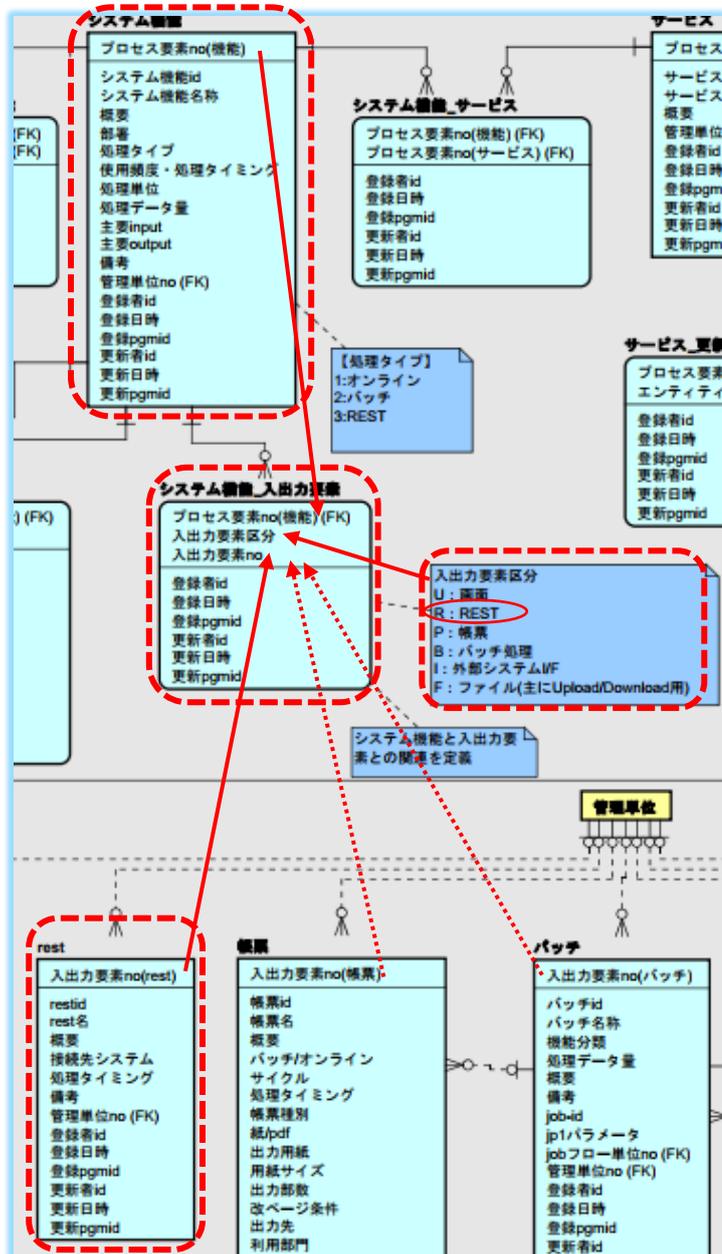
このテーブルは REST 以外のテーブルからもシステム機能へ紐付けデータを残すため、

どれを紐付けたか仕分けが必要になり、『入出力要素区分』でどのテーブルの

入出力要素 no なのかを仕分け管理しています。

SQL を作成するときは入出力要素区分にきをつけて作成します。

(コピー元のままで作成してしまうとデータが混ざってしまう為)



「シーケンス = サロゲートキー とは」

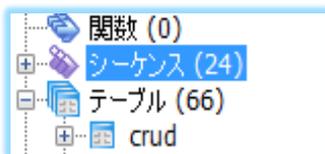
記で使用している [入出力要素 no] はシーケンスになります。

このレコードはデータが増えた時に自動でナンバーを作ってくれる役割です。

nextval = 自動的にNOを作ってくれるkey (今持っているNOに+1追加していく)
ポスグレを開き、てーぶるを確認すると下記図の様に nextval があります。

```
CREATE TABLE public."画面"  
(  
  "入出力要素no(画面)" integer NOT NULL DEFAULT nextval('画面_入出力要素no(画面)_seq'  
  "画面id" character varying(20) NOT NULL,  
  "画面名" character varying(60),  
  "概要" character varying(800)
```

ここでも確認できます。シーケンスの中で確認できる。



自動的に NO を作成する様子が SQL ビューで確認できます。

スタートに今までカウントしている件数がわかります。

次に入れたデータは 5 になります。

```
SQLビュー  
1  -- Sequence: public."画面_入出力要素no(画面)_seq"  
2  
3  -- DROP SEQUENCE public."画面_入出力要素no(画面)_seq";  
4  
5  CREATE SEQUENCE public."画面_入出力要素no(画面)_seq"  
6    INCREMENT 1  
7    MINVALUE 1  
8    MAXVALUE 9223372036854775807  
9    START 4  
10   CACHE 1;  
11  ALTER TABLE public."画面_入出力要素no(画面)_seq"  
12    OWNER TO postgres;  
13
```

インサート時はプラス1でnoを作成

アップデート時は4は4のまま内容だけを更新できる。

プログラムのコピー

「紐付け登録画面を作成する。プログラム名は **DG_620R** と **DG_630U** です。

DG_620R は一覧画面作成と同じ。DG_630U は登録画面の紐付け機能付きです。」

- 1.紐付け画面の雛型 [DG_600R] から [**DG_620R**] をコピーする
- 2.紐付け画面の雛型 [DG_610U] から [**DG_630U**] をコピーする

DG_620R は実践 1 を参考に作成します。

DG_630U を実践 3 で作成します。

※コピーの手順は実践 1 に記載済

クライアント側を作成する

Html

紐付け部分のクライアント側を確認します。

※他は実践 1 と同じ手順で作成



紐付け部分があるためテーブルが 2 つに分かれて作られています。

[テーブル 1 の Html]

```
<ul class="nav nav-pills rmenu-ul"> <!-- menu-ul スタート -->
<li class="rmenu-li"> <!-- menu-li スタート -->

<div id="scrollTable-TableH1"> <!-- テーブル スクロール スタート -->
<table id="mainTableH1" class="table table-condensed rmenuTable">
<thead>
<tr>
<th class="width50">追加</th>
<th class="width50">削除</th>
<th class="width100">rest ID</th>
<th class="width150">rest名</th>
<th class="width200">概要</th>
<th class="width150">接続先システム</th>
<th class="width150">処理タイミング</th>
<th class="width220">備考</th>
<th class="width210">システム機能</th>
<th class="width50">
<div>紐づけ</div>
<div>選択</div>
</th>
</tr>
</thead>
</table>
</div> <!-- テーブル スクロール エンド -->

<div id="scrollTable-TableD1"> <!-- テーブル スクロール スタート -->
<table id="mainTable1" class="table table-condensed rmenuTable">
<tbody>
<tr>
<td class="width50">
<input name="行追加" type="button" class="行追加 btn color4 btn-sm rfocusblue" value="追加">
</td>
<td class="width50">
<input name="削除" type="checkbox" class="削除 rfocusblue" value="削除">
</td>
<td class="width100">
<input name="rest ID" type="text" value="" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft rest ID">
</td>
<td class="width150">
<input name="rest名" type="text" value="" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft rest名">
</td>
<td class="width200">
<textarea name="概要" rows="3" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft 概要"></textarea>
</td>
<td class="width150">
<textarea name="接続先システム" rows="3" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft 接続先システム"></textarea>
</td>
<td class="width150">
<input name="処理タイミング" type="text" value="" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft 処理タイミング">
</td>
<td class="width220">
<textarea name="備考" rows="3" class="form-control input-sm rfocusblue rmenuLeft 備考"></textarea>
</td>
<td class="width210 rmenuLeft システム機能">
</td>
<td class="width50">
<input name="紐づけ選択" type="radio" class="紐づけ選択 rfocusblue" value="1">
</td>
</tr>
</tbody>
</table>
</div> <!-- テーブル スクロール エンド -->

</li> <!-- menu-li エンド -->
</ul> <!-- menu-ul エンド -->
<div class="menu-float-clear"> <!-- float 解除 -->
```

[テーブル 2 の Html]

```
<ul class="nav nav-pills rmenu-ul"> <!-- menu-ul スタート -->↓
<li class="rmenu-li"> <!-- menu-li スタート -->↓

<div id="scrollable-TableH2"> <!-- テーブル スクロール スタート -->↓
<table id="mainTableH2" class="table table-condensed rmenuTable">↓
<thead>↓
<tr>↓
<th class="width50">↓
<div>紐づけ</div>↓
<div>実行</div>↓
</th>↓
<th class="width110">システム機能 I D</th>↓
<th class="width250">システム機能名称</th>↓
</tr>↓
</thead>↓
</table>↓
</div> <!-- テーブル スクロール エンド -->↓

<div id="scrollable-TableD2"> <!-- テーブル スクロール スタート -->↓
<table id="mainTable2" class="table table-condensed rmenuTable">↓
<tbody>↓
<tr>↓
<td class="width50">↓
<input name="紐づけ実行" type="checkbox" class="紐づけ実行 rfocusblue" value="1">↓
</td>↓
<td class="width110 rmenuLeft" システム機能 I D">↓
</td>↓
<td class="width250 rmenuLeft" システム機能名称">↓
</td>↓
</tr>↓
</tbody>↓
</table>↓
</div> <!-- テーブル スクロール エンド -->↓
↓
</li> <!-- menu-li エンド -->↓
</ul> <!-- menu-ul エンド -->↓
<div class="rmenu-float-clear"> <!-- float 解除 -->↓
</div>↓
```

点線内が紐付けを作成しています。

※コピー元と同じの為項目名の変更箇所だけ作成で OK です

CSS

※実践 1 と同じ

幅を調節します。

コントローラ

DG_630U のコントローラを開きます。

ここには同じ紐づけの指示がありません。

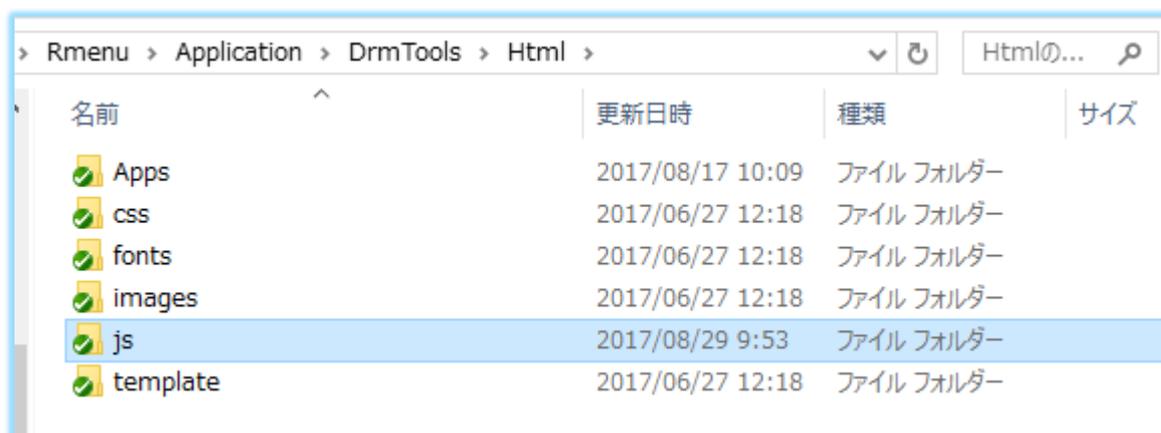
コピー元など複数の画面で同じ操作を行う為、共通の mixin に指示が書かれています。

ここで利用している mixin の確認方法は点線内の書かれています。

```
1 (function($, $R){↓
2 //名前空間を設定する↓
3 var App = $R.Application.DG_630U;↓
4 ↓
5 //インスタンスプロパティを追加する↓
6 var Controller = App.Controller = new $R.Class($R.Controller)
7 Controller.fn.init = function(appspec, model, view){↓
8 $R.log("Controller:init:start");↓
9 ↓
10 this.appspec = appspec;↓
11 this.model = model;↓
12 this.view = view;↓
13 this.createPubSubEvent();↓
14 ↓
15 $R.log("Controller:init:end");↓
16 };↓
17 ↓
18 //モジュールを追加する↓
19 Controller.include($R.Library.EnterTabPFKeyMixin);↓
20 Controller.include($R.Library.ControllerMixin);↓
21 ↓
22 //マスターメンテパターンのミックスインを追加する↓
23 Controller.include($R.Library.MasterMainte2ControllerMixin);↓
24 Controller.include($R.Library.PgwBrowserControllerMixin);↓
```

図のライブラリーを開きます。

mixin は js フォルダーの中に保管されています。



名前	更新日時	種類	サイズ
Apps	2017/08/17 10:09	ファイル フォルダ	
css	2017/06/27 12:18	ファイル フォルダ	
fonts	2017/06/27 12:18	ファイル フォルダ	
images	2017/06/27 12:18	ファイル フォルダ	
js	2017/08/29 9:53	ファイル フォルダ	
template	2017/06/27 12:18	ファイル フォルダ	

サーバー側を作成する

データセットJSON

※実践2と同様

コピー元と違う部分の項目名を作成します。

主にテーブル1の作成のため、[id: detail1]をHtmlと合わせて作成します。

```
↓ ↓
{
  "id": "detail1", ↓
  "multiline": "yes", ↓
  "defaultline": "30", ↓
  "record": { ↓
    "入出力要素NO": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "削除": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "restID": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "rest名": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "概要": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "接続先システム": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "処理タイミング": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "備考": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "プロセス要素NO1": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "システム機能": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }, ↓
    "更新日時": { ↓
      "value": [""], ↓
      "idx": [""] ↓
    }
  }
}
```

バリデーションJSON

※実践2と同様

①データセットを確認し、項目名を作成します。

②ポストグレで文字数を確認して [min] と [max] を作成します。

```
[
  "id": "detail",
  "multiline": "yes",
  "defaultline": "30",
  "record": {
    "入出力要素NO": {
      "validation": "nonrequired",
      "integerP": true,
      "min": "1",
      "max": "11"
    },
    "restID": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "20"
    },
    "rest名": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "60"
    },
    "概要": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "900"
    },
    "接続先システム": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "60"
    },
    "処理タイミング": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "60"
    },
    "備考": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "900"
    },
    "プロセス要素NO1": {
      "validation": "nonrequired",
      "free": true,
      "min": "1",
      "max": "11"
    }
  }
]
```

トランJSON

※実践2と同様

同様にデータセットから項目名を作成する。

トランはセレクトとアップデート2つあります。

※実践 2 と同じ

① アウトプットをデータセットから作成

② AS をアウトプットから作成

③ SQL を作成

※ER 図を確認することで確認した入出力要素区分の作成に注意する

④ ジェネレート SQL の場合、**[field/table/funct]** が必要な場合は作成する

updateSQLJ SON

アップデート SQL は実践 2 とほとんど同じですが、紐付け部分が違うので確認します。

下記図の紐付けが追加されています。

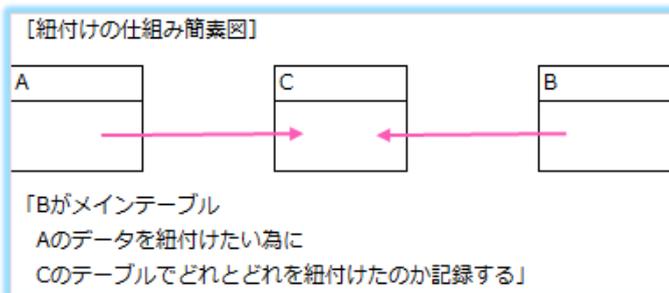
【updatesqlの構成を確認する】

削除処理	id": "delete1	テーブルのデータが削除されたときにDBデータを削除する処理	} インプットのみ アウトプットなし 書き込む目的の為
削除処理	id": "delete2	テーブルのデータが削除されたときに紐付け内容も一緒に削除する処理	
更新処理	id": "update	テーブルでデータが変更されたときにDBへデータを上書更新する処理	
削除処理	id": "delete_IO	紐付けテーブルで削除が押下された時の処理	
登録処理	id": "insert_IO	紐付けテーブルで紐付けが押下された時の処理	
新規処理	id": "insert	テーブルで新規登録がされたときにDBへデータを書き込む処理	
照会処理	id": "detail1	実行された時にセレクトでテーブルのデータを 表示する処理	} アウトプットあり

※アウトプットなし = インプットで DB へ入れるため

※アウトプットあり = 更新した DB からデータを出すため

【紐付けの仕組み】



【画面とER図】

システム機能	紐づけ 選択	紐づけ 実行	システム機能ID
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	1
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	11
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	111
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	1111

[照会処理を作成]

[updatesqlの構成を確認する]

削除処理	id": "delete1	テーブルのデータが削除されたときにDBデータを削除する処理	インプットのみ アウトプットなし 書き込む目的の為
削除処理	id": "delete2	テーブルのデータが削除されたときに紐付け内容も一緒に削除する処理	
更新処理	id": "update	テーブルでデータが変更されたときにDBへデータを上書き更新する処理	
削除処理	id": "delete_IO	紐付けテーブルで削除が押下された時の処理	
登録処理	id": "insert_IO	紐付けテーブルで紐付けが押下された時の処理	
新規処理	id": "insert	テーブルで新規登録がされたときにDBへデータを書き込む処理	アウトプットあり
照会処理	id": "detail1	実行された時にセレクトでテーブルのデータを表示する処理	

①アウトプットを作成する

(ジェネレート SQL 時は [field/table/funct] 注意)

② [Funct] は freesql の為内容に注意

入出力要素区分がコピー元と違う為、ER 図を確認して [R] を作成する。

```

output : ↓
"multiline": "yes", ↓
"record": ↓
"入出力要素NO": ↓
"value": [""], ↓
"field": "%入出力要素no(rest)%" , ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"restID": ↓
"value": [""], ↓
"field": "restid", ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"rest名": ↓
"value": [""], ↓
"field": "rest名", ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"概要": ↓
"value": [""], ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"接続先システム": ↓
"value": [""], ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"処理タイミング": ↓
"value": [""], ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"備考": ↓
"value": [""], ↓
"table": "A" ↓
}, ↓
"プロセス要素NO1": ↓
"func": "ARRAY_TO_STRING(ARRAY(SELECT B.%"プロセス要素no(機能)%" FROM システム機能
入出力要素 AS B WHERE A.%"入出力要素no(rest)%" = B.入出力要素no AND B.入出力要素区分 = 'R')
ORDER BY B.%"プロセス要素no(機能)%" ),',,')" ↓
}, ↓
"システム機能": ↓
"func": "ARRAY_TO_STRING(ARRAY(SELECT C.システム機能id || ' ' || C.システム機能名
FROM システム機能 C WHERE %"プロセス要素no(機能)%" IN (SELECT B.%"プロセス要素no(機能)%" F
ROM システム機能 AS B WHERE A.%"入出力要素no(rest)%" = B.入出力要素no AND B.入出
力要素区分 = 'R') ORDER BY B.%"プロセス要素no(機能)%" ), '<br>')" ↓
}, ↓
"更新日時": ↓
"value": [""], ↓
"func": "TO_CHAR(A.更新日時, 'YYYY/MM/DD_HH24:MI:SS.MS')" ↓
}
    
```

[削除処理を作成]

[updatesqlの構成を確認する]

削除処理	id": "delete1	テーブルのデータが削除されたときにDBデータを削除する処理	}	インプットのみ アウトプットなし 書き込む目的の為
削除処理	id": "delete2	テーブルのデータが削除されたときに紐付け内容も一緒に削除する処理		
更新処理	id": "update	テーブルでデータが変更されたときにDBへデータを上書き更新する処理	}	アウトプットあり
削除処理	id": "delete_IO	紐付けテーブルで削除が押下された時の処理		
登録処理	id": "insert_IO	紐付けテーブルで紐付けが押下された時の処理		
新規処理	id": "insert	テーブルで新規登録がされたときにDBへデータを書き込む処理		
照会処理	id": "detail1	実行された時にセレクトでテーブルのデータを 表示する処理		

①

```

sqls : : :
  comment : "rest 削除処理",
  id : "delete1",
  before : "setDeleteDataOfDrmTools('detail1','delete1','入出力要素NO')",
  after : "",
  sql : {
    type : "delete",
    freesql : {
      genesql : {
        dist : {
          from : rest,
          where : "¥入出力要素no(rest)¥ = ?",
          order :
        }
      }
    },
    input : {
      multiline : "yes",
      record : {
        "入出力要素NO" : {
          value : [""],
          field : "¥入出力要素no(rest)¥"
        }
      }
    }
  },
  comment : "システム機能_入出力要素 削除処理",
  id : "delete2",
  before : "setDeleteDataOfDrmTools('detail1','delete2','入出力要素NO')",
  after : "",
  sql : {
    type : "delete",
    freesql : {
      genesql : {
        dist : {
          from : "システム機能_入出力要素",
          where : "入出力要素区分 = 'R' AND 入出力要素no = ?",
          order :
        }
      }
    },
    input : {
      multiline : "yes",
      record : {
        "入出力要素NO" : {
          value : [""],
          field : "入出力要素no"
        }
      }
    }
  }
}

```

→Ruby①へ

←テリートします

←メインテーブル
←条件

→Ruby②へ

←テリートします

←紐付けテーブル

↑のRは紐付けテーブルにrestの紐付けデータである事を「R」で区分して管理している

[紐付けテーブルの処理を作成]

[updatesqlの構成を確認する]

削除処理	id: "delete1	テーブルのデータが削除されたときにDBデータを削除する処理	}	インプットのみ アウトプットなし 書き込む目的の為
削除処理	id: "delete2	テーブルのデータが削除されたときに紐付け内容も一緒に削除する処理		
更新処理	id: "update	テーブルでデータが変更されたときにDBへデータを上書更新する処理		
削除処理	id: "delete_IO	紐付けテーブルで削除が押下された時の処理		
登録処理	id: "insert_IO	紐付けテーブルで紐付けが押下された時の処理		
新規処理	id: "insert	テーブルで新規登録がされたときにDBへデータを書き込む処理	}	アウトプットあり
照会処理	id: "detail1	実行された時にセレクトでテーブルのデータを表示する処理		

※入出力要素区分を作成忘れないように注意する

① [紐付けテーブルの紐付けデータを削除する]

```
"comment": "システム機能 入出力要素 削除処理", ↓
"id": "delete_IO", ↓
"before": "setUpdateDataOfDrmTools('detail1', 'delete_IO', '入出力要素NO')", →Ruby④へ
"after": "", ↓
"sql": { ↓
  "type": "delete", ↓ ←デリートします
  "freesql": "", ↓
  "genesql": "", ↓
  "dist": "", ↓
  "from": "システム機能 入出力要素", ↓ ←紐付けテーブルから
  "where": "入出力要素区分 = (R) AND 入出力要素no. = ?", ↓ ←条件を
  "order": "", ↓
}, ↓
"input": { ↓
  "multiline": "yes", ↓
  "record": { ↓
    "入出力要素NO": { ↓
      "value": [""], ↓
      "field": "入出力要素no" ↓
    } ↓
  } ↓
}
```

② [紐付けテーブルへ紐付けデータを更新]

```

RUBY "comment": "システム機能 入出力要素 登録処理", ↓
RUBY "id": "insert_I0", ↓
RUBY "before": "setInsertシステム機能 入出力要素OfDG_630U('detail', 'insert_I0')", →Ruby③へ
RUBY "after": {}, ↓
RUBY "sql": {}, ↓
RUBY "type": "insert", ↓ ←インサート更新する
RUBY "freesql": {}, ↓
RUBY "genesql": {}, ↓
RUBY "dist": {}, ↓
RUBY "from": "システム機能 入出力要素", ↓ ←紐付けテーブル
RUBY "where": {}, ↓
RUBY "order": {}, ↓
RUBY "input": {}, ↓
RUBY "multiline": "yes", ↓
RUBY "record": {}, ↓
RUBY "プロセス要素NO1": {}, ↓
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "field": "プロセス要素no(機能)", ↓
RUBY "入出力要素区分": {}, ↓
RUBY "value": ["R"], ↓ ←インプットヘテーブルの項目名を作成する
RUBY "入出力要素NO": {}, ↓ (入出力要素区分を作成する)
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "field": "入出力要素no", ↓
RUBY "登録日時": {}, ↓
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "funct": "CURRENT_TIMESTAMP", ↓
RUBY "登録者id": {}, ↓
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "fromtype": "request", ↓
RUBY "fromid": "login", ↓
RUBY "fromio": "", ↓
RUBY "fromname": "ユーザID", ↓
RUBY "登録pgmid": {}, ↓
RUBY "value": ["DG_630U"], ↓
RUBY "更新日時": {}, ↓
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "funct": "CURRENT_TIMESTAMP", ↓
RUBY "更新者id": {}, ↓
RUBY "value": [""], ↓
RUBY "fromtype": "request", ↓
RUBY "fromid": "login", ↓
RUBY "fromio": "", ↓
RUBY "fromname": "ユーザID", ↓
RUBY "更新pgmid": {}, ↓
RUBY "value": ["DG_630U"], ↓
RUBY "": {}, ↓

```

[新規処理を作成]

[updatesqlの構成を確認する]

削除処理	id": "delete1	テーブルのデータが削除されたときにDBデータを削除する処理	インプットのみ アウトプットなし 書き込む目的の為
削除処理	id": "delete2	テーブルのデータが削除されたときに紐付け内容も一緒に削除する処理	
更新処理	id": "update	テーブルでデータが変更されたときにDBへデータを上書更新する処理	
削除処理	id": "delete_IO	紐付けテーブルで削除が押下された時の処理	
登録処理	id": "insert_IO	紐付けテーブルで紐付けが押下された時の処理	
新規処理	id": "insert	テーブルで新規登録がされたときにDBへデータを書き込む処理	アウトプットあり
照会処理	id": "detail1	実行された時にセレクトでテーブルのデータを 表示する処理	

```

"comment": "rest 新規処理", ↓
" id": "insert", ↓
"before": "setInsertDataOfDrmTools('detail1','insert','入出力要素NO')", →Ruby⑧へ
"after": "", ↓
"sql": "", ↓
" type": "insert", ↓ ←インサート更新する
" freesql": "", ↓
" genesql": "", ↓
" dist": "", ↓ ←メインテーブル
" from": "rest", ↓
" where": "", ↓
" order": "", ↓
"input": { ↓
  "multiline": "yes", ↓
  "record": { ↓
    "restID": { ↓
      "value": [""], ↓
      "field": "restid" ↓
    }, ↓
    "rest名": { ↓
      "value": [""], ↓
      "field": "rest名" ↓
    }, ↓
    "概要": { ↓
      "value": [""] ↓
    }, ↓
    "接続先システム": { ↓
      "value": [""] ↓
    }, ↓
    "処理タイミング": { ↓
      "value": [""] ↓
    }, ↓
    "備考": { ↓
      "value": [""] ↓
    }, ↓
    "検索管理単位NO": { ↓
      "value": [""], ↓
      "field": "管理単位no", ↓
      "fromtype": "request", ↓
      "fromid": "header", ↓
      "fromio": "", ↓
      "fromname": "検索管理単位NO" ↓
    }, ↓
    "登録日時": { ↓
      "value": [""], ↓
      "funct": "CURRENT_TIMESTAMP" ↓
    }, ↓
    "登録者id": { ↓
      "value": [""], ↓
      "fromtype": "request", ↓
      "fromid": "login", ↓
      "fromio": "", ↓
      "fromname": "ユーザID" ↓
    }, ↓
    "登録pgmid": { ↓
      "value": ["DG_630U"] ↓
    }, ↓
    "更新日時": { ↓
      "value": [""], ↓
      "funct": "CURRENT_TIMESTAMP" ↓
    }, ↓
    "更新者id": { ↓
      "value": [""], ↓
      "fromtype": "request", ↓
      "fromid": "login", ↓
      "fromio": "", ↓
      "fromname": "ユーザID" ↓
    }, ↓
    "更新pgmid": { ↓
      "value": ["DG_630U"] ↓
    }, ↓
  } ↓
} ↓

```

←インプットへテーブルの項目名を作成する

Ruby

updateSQL の before に書かれていた Ruby を確認する。モデル ruby を開きます。

①Ruby 中のプログラム名がコピー元のままで変換されない為、

プログラム名 [DG_630U] を作成します。

②Mixin を読み込んでいるため、内容を確認します。

[DG_630U_model.rb]

```
1 #coding:UTF-8↓
2 ↓
3 require 'DrmTools/Server/Modules/DrmToolsOfBaseNameMaInteOfModelMixin'↓
4 ↓
5 ↓
6 class DG_630U_model↓
7   include DrmToolsOfBaseNameMaInteOfModelMixin↓
8   ↓
9   def initialize(rmenu_dbi, sql_data, request_data)↓
0     begin↓
1       #initialize_開始ログを出力する↓
2       $Mlog.debug("DG_630U_model")["initialize_start"]↓
3       管用↓
4       ↓
5       @rmenu_dbi = rmenu_dbi↓
6       @sql_data = sql_data↓
7       @request_data = request_data↓
8       ↓
9       #initialize_終了ログを出力する↓
0       $Mlog.debug("DG_630U_model")["initialize_normal_end"]↓
1       管用↓
2       rescue Exception↓
3         #エラーログを出力する↓
4         $Mlog.error("DG_630U_model")["initialize_exception:#{ $! }"]↓
5         管用↓
6         raise↓
7       end↓
8     end↓
9     ↓
0     #システム機能_入出力要素の登録処理を設定する↓
1     def setInsertシステム機能_入出力要素OfDG_630U(request ID, sqlsId)↓
2       $Mlog.debug( "DrmToolsOfBaseNameMaInteOfModelMixin_model")["setInsertシ
3       要素OfDG_630U_start"] #LogファイルDebug用↓
4       ↓
5       requestRecord = getJsonChunkById(@request_data, "records", request ID,
6       ↓
7       sqlRecord = getJsonChunkById(@sql_data, "sqls", sqlsId,
8       ↓
```

[updateSQL の before 一覧]

下記を確認すると 4 種類の ruby が使われていることがわかる

- ① "comment": " r e s t 削除処理",
"id": "delete1",
"before": "setDeleteDataOfDrmTools('detail1', 'delete1', '入出力要素NO')",

- ② "comment": "システム機能_入出力要素 削除処理",
"id": "delete2",
"before": "setDeleteDataOfDrmTools('detail1', 'delete2', '入出力要素NO')",

- ③ "comment": " r e s t 更新処理",
"id": "update",
"before": "setUpdateDataOfDrmTools('detail1', 'update', '入出力要素NO')",

- ④ "comment": "システム機能_入出力要素 削除処理",
"id": "delete_IO",
"before": "setUpdateDataOfDrmTools('detail1', 'delete_IO', '入出力要素NO')",

- ⑤ "comment": "システム機能_入出力要素 登録処理",
"id": "insert_IO",
"before": "setInsert システム機能_入出力要素 OfDG_630U('detail1', 'insert_IO')",

- ⑥ "comment": "システム機能_入出力要素 登録処理",
"id": "insert_IO",
"before": "setInsert システム機能_入出力要素 OfDG_630U('detail1', 'insert_IO')",

- ⑦ "comment": " r e s t 新規処理",
"id": "insert",
"before": "setInsertDataOfDrmTools('detail1', 'insert', '入出力要素NO')",

[model.rb を開く]

[def] に続き、指定のプログラムがある

下記は⑤⑥の sql で使われている ruby です。

プログラム名・項目名を作成します。

```
↓
#システム機能_入出力要素の登録処理を設定する↓
def setInsertシステム機能_入出力要素OfDG_630U(requestID,sqlsId)↓
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model"){"setInsertシステム機能_入出力要素OfDG_630U_start"}
  #_Logファイル_Debug用↓
  ↓
  requestRecord = getJsonChunkById(@request_data,"records",requestID, "record")↓
  sqlRecord = getJsonChunkById(@sql_data,"sqls",sqlsId,"input","record")↓
  ↓
  maxLength = requestRecord["削除"]["value"].length-1↓
  k = 0↓
  emptySW = "PASS"↓
  ↓
  for i in 0..maxLength do↓
    #_削除データは処理対象外↓
    if requestRecord["削除"]["value"][i] == "9"↓
      next↓
    end↓
    ↓
    #_新規データは処理対象外↓
    if requestRecord["入出力要素NO"]["value"][i] == ""↓
      next↓
    end↓
    ↓
    #_システム機能未設定データは処理対象外↓
    if requestRecord["プロセス要素NO1"]["value"][i] == ""↓
      next↓
    end↓
    ↓
    #_SQLのINPUT項目にリクエストデータを設定する↓
    w_プロセス要素NO配列 = requestRecord["プロセス要素NO1"]["value"][i].split(",")↓
    maxSize = w_プロセス要素NO配列.length-1↓
    for j in 0..maxSize do↓
      sqlRecord["プロセス要素NO1"]["value"][k] = w_プロセス要素NO配列[j]↓
      sqlRecord["入出力要素NO"]["value"][k] = requestRecord["入出力要素NO"]["value"][i]↓
      ↓
      k = k + 1↓
      emptySW = "OK"↓
    end↓
  end↓
  ↓
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model"){"setInsertシステム機能_入出力要素OfDG_630U_end_status=#{emptySW}"}
  ↓
  return emptySW↓
end↓
↓
```

[共通の mixin.rb を開く]

※共通の mixin は触らないので確認のみ。

削除データを設定

下記は①②の sql で使われている ruby です。

```
#!/usr/bin/env ruby
# 基本名称メンテナンス用モジュール
# 削除データを設定する
def setDeleteDataOfDrmTools(requestID, sqlsId, idName)
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setDeleteDataOfDrmTools_start"}
  # LogファイルDebug用
  ↓
  requestInfo = getJsonChunkById(@request_data, "records", requestID)
  requestRecord = requestInfo["record"]
  ↓
  sqlInfo = getJsonChunkById(@sql_data, "sqls", sqlsId)
  sqlRecord = sqlInfo["input"]["record"]
  ↓
  deleteCheck = requestRecord["削除"]["value"]
  idData = requestRecord[idName]["value"]
  maxLength = deleteCheck.length - 1
  j = 0
  emptySW = "PASS"
  ↓
  for i in 0..maxLength do
    if deleteCheck[i] != "9"
      next
    end
    if idData[i] == ""
      next
    end
  end
  ↓
  requestRecord.each{|key, value|
    if sqlRecord.key?("#{key}")
      sqlRecord[key]["value"][j] = value["value"][i]
      emptySW = "OK"
    end
  }
  j = j + 1
  end
  ↓
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setDeleteDataOfDrmTools_end_status=#{emptySW}"}
  ↓
  return emptySW
end
```

更新データを設定

下記は③④の sql で使われている ruby です。

```
##基本名称メンテナンス用 ☐モジュール↓
##更新データを設定する↓
def setUpdateDataOfDrmTools(requestID, sqlsId, idName)↓
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setUpdateDataOfDrmTools_start"}
  LogファイルDebug用↓

  requestInfo = getJsonChunkById(@request_data, "records", requestID)↓
  requestRecord = requestInfo["record"]↓

  sqlInfo = getJsonChunkById(@sql_data, "sqls", sqlsId)↓
  sqlRecord = sqlInfo["input"]["record"]↓

  deleteCheck = requestRecord["削除"]["value"]↓
  idData = requestRecord[idName]["value"]↓
  maxLength = deleteCheck.length↓
  j = 0↓
  emptySW = "PASS"↓
  for i in 0..maxLength do↓
    if deleteCheck[i] == "9"↓
      next↓
    end↓
    if idData[i] == ""↓
      next↓
    end↓

    requestRecord.each {|key, value|↓
      if sqlRecord.key?("#{key}")↓
        sqlRecord[key]["value"][j] = value["value"][i]↓
        emptySW = "OK"↓
      end↓
    }↓
    j = j + 1↓
  end↓

  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setUpdateDataOfDrmTools_end_status=#{emptySW}"}

  return emptySW↓
end↓
```

登録データを設定

下記は⑦の sql で使われている ruby です。

```

# 基本名称メンテナンス用モジュール↓
# 登録データを設定する↓
def setInsertDataOfDrmTools(requestID, sqlsId, idName)↓
  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setInsertDataOfDrmTools_start"}
  LogファイルDebug用↓

  requestInfo = getJsonChunkById(@request_data, "records", requestID)↓
  requestRecord = requestInfo["record"]↓

  sqlInfo = getJsonChunkById(@sql_data, "sqls", sqlsId)↓
  sqlRecord = sqlInfo["input"]["record"]↓

  deleteCheck = requestRecord["削除"]["value"]↓
  idData = requestRecord[idName]["value"]↓
  maxLength = deleteCheck.length - 1↓
  j = 0↓
  emptySW = "PASS"↓
  for i in 0..maxLength do↓
    if deleteCheck[i] != "9"↓
      next↓
    end↓
    if idData[i] != ""↓
      next↓
    end↓

    requestRecord.each { |key, value|↓
      if sqlRecord.key?("#{key}")↓
        sqlRecord[key]["value"][j] = value["value"][i]↓
        emptySW = "OK"↓
      end↓
    }↓
    j = j + 1↓
  end↓

  $Mlog.debug("DrmToolsOfBaseNameMainteOfModelMixin_model") {"setInsertDataOfDrmTools_end_status=#{emptySW}"}

  return emptySW↓
end↓

```